

浄土

monthly JÔDO

2021
June

令和3年

vol.87

no.954

〔浄土アーカイブ〕

授かりし智慧 倉田百三（劇作家・評論家）



〔寺々刻々〕
蝦夷地布教の拠点・有珠善光寺 鶴飼秀徳
〔新シリーズ〕
漫画祖師伝「良忠上人」その1 ぐんじまん

法然上人鑽仰会

古物漂流

文と写真 ● 三宅政吉
(グラフィックデザイナー)

連載5 千支文様古代中国銅鏡

銅鏡は古代中国に起源をもつ銅合金（青銅製）の鏡で、朝鮮半島やこの国をふくめた東アジアで広く使用された鏡である。おもに宗教的な祭祀用具としての機能をもっていたが、近代に入って西洋からガラス鏡が伝わるまで日常生活の中でも広く使われていた。

古代中国の銅鏡は長年にわたる発掘で、夥しい数の遺物が出土していることに加えて、伝世の遺物も公開され、描かれた文様や文献資料から調査研究が進んでいる。

背面に描かれた（刻まれたり、浮き彫りになった）文様や図柄の比較と整理によって時代や地域が特定され、古代中国の宇宙観や歴史を読み解く重要な遺物である。

写真の銅鏡は、知人から譲り受けたものである。描かれているのは兎、虎（寅）、蛇、猿の姿と漢字である。千支を表す十二の銅鏡のうちの四つということになる。

知人は、これが本当に古代中国の出土品である確証はないと言いついて譲ってくれた。入手先の骨董屋は中国の出土品であることは間違いないが、年代も地域も不明と言っているらしい。古色を施したお土産品かもしれない。むしろそちらの可能性の方が高いのではないかと。

古代中国の銅鏡に描かれた内容は多岐にわたるが、いずれも精緻な文様であり、この千支文様のように単純化

された浮き彫りの絵柄は珍しい。

直径は四十四mmと極めて小さい。後代に作られた贋物の可能性は高いが、描かれた動物たちが可愛らしいし、サイズ的にもその可愛らしさにマッチしており、なかなか味わい深い銅鏡である。

もしかするとこのサイズからして、生まれた子どもの千支に合わせ、お守りとして親から贈られたものではないか、などと勝手な想像を楽しんでいる。



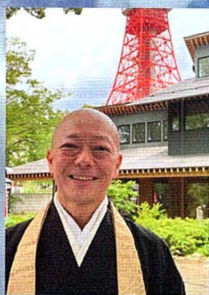
直径は44mm、厚みは4mm。どの図もリズム感があって見ていて飽きない。後代に作られた贋作の場合、酸っぱい臭いがするらしいが、この銅鏡からはそんな臭いはしない。

東京・港区

宝珠院

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

紀行 寺院

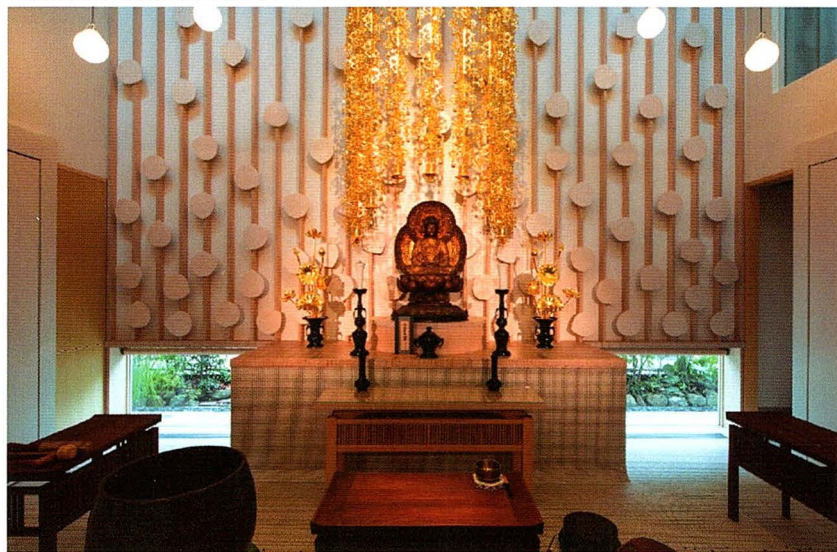


宝珠院第23世
森俊人住職



三縁山宝珠院本堂。
左手が樹木葬の霊園

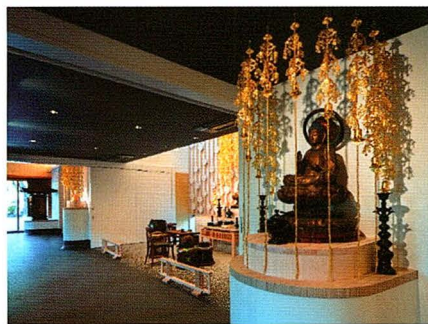
宝珠院本堂。伽藍は奥に長い作りになっている



港七福神の弁天様が祀られている



薬師如来像



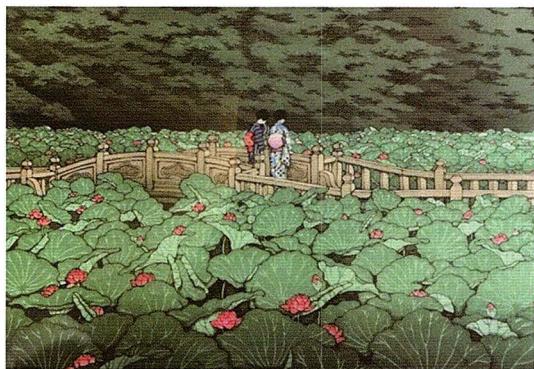
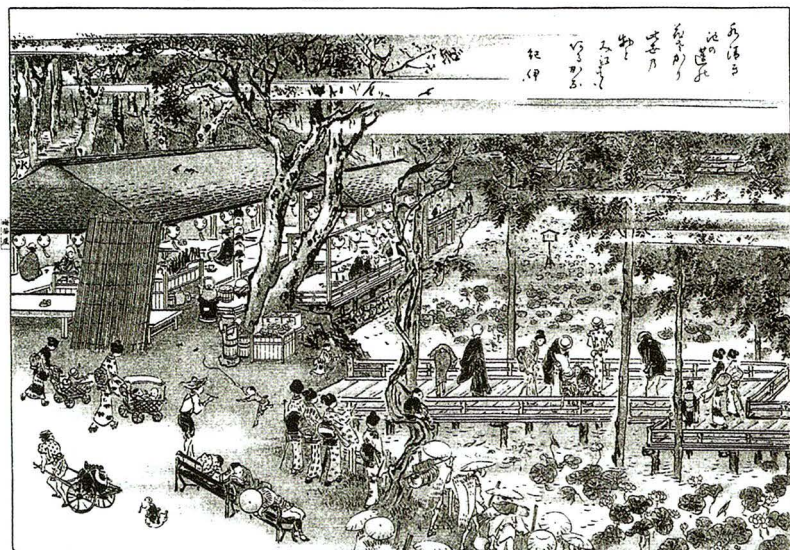
本尊、阿彌陀如来坐像



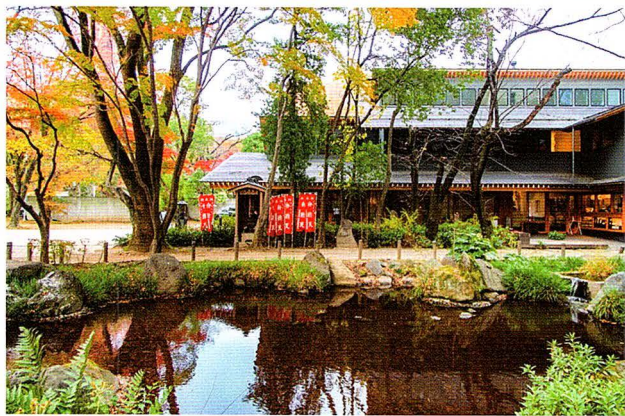
江戸時代から人気の閻魔様は正面に祀られている



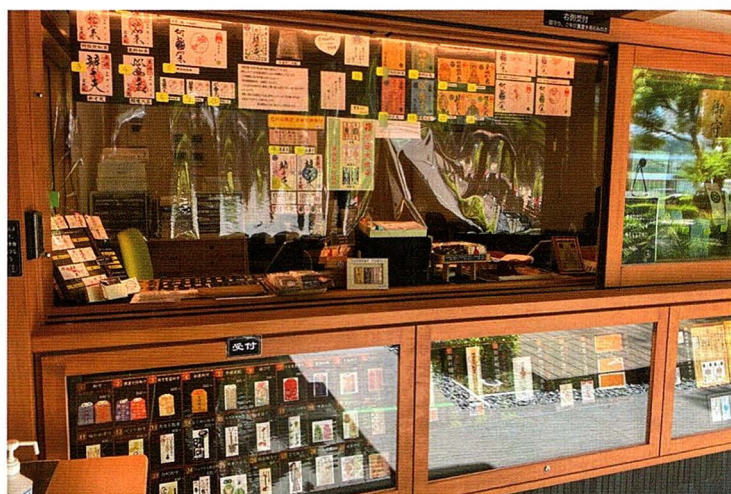
「弁天社裏面蓮池の図」と題された絵図。



大正、昭和期の浮世絵師であり
版画家であった川瀬巴水作の芝
弁天池



弁天池の正面に建つ宝珠院本堂



御朱印と御守りがズラッと並ぶ授与窓口



現代のニーズに合わせた新生宝珠院樹木葬



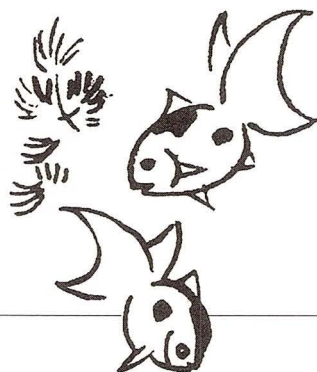
樹木葬は個人墓から4人までで、7年と13年が一応の目処で合葬される

浄土

2021/6月号 目次

カラ―グラビア=寺院紀行 東京・芝 宝珠院	1
寺院紀行 東京・芝 宝珠院	真山 剛 6
寺々刻々⑪ 蝦夷地布教の拠点・有珠善光寺	鵜飼秀徳 14
『浄土』アーカイブ 授かりし智慧	倉田百三 18
漫画「浄土宗のお祖師様」三祖良忠上人①	ぐんじまん 25
みんなの境内 誕生寺・歴代住職に想いをはせて ...	漆間勇哲 28
連載インド紀行⑫「ナーランダ」	佐藤良純 29
みんなの境内 新刊紹介ほか	33
連載小説「式子内親王遺文」第3回	石丸晶子 34
微風吹動「ハスとスイレン 広く徳本を植えよ」...	石田一裕 42
江戸 日本の街道探訪 第5回	森 清鑑 46
『浄土』アーカイブ 法然上人讃仰会の設立後	佐藤賢順 54
編集後記	56

表2 古物漂流⑤	三宅政吉
----------------	------



表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙写真=若林隆壽

アートディレクション=近藤十四郎

寺院紀行

東京・港区

宝珠院

ほうしゅいん

まやま ごと

1958年東京生まれ。大学卒業後出版社に勤務、12年間、男性月刊紙の編集部
に籍をおく。その後フリーとなり主に寺
院関係の編集や執筆に携わっている。

文・撮影

真山剛

蓮池時文附近の園



新撰東京名所図絵第七編（1897）と題された絵。左手前が宝珠院

江戸名所、蓮池前の宝珠院

東京タワーが見えてくると「東京に着いたか」と気分が少し高揚する旅行者は多いだろう。旅行者でなくとも、ビルの隙間から見える東京タワーに自然と目がとまる。電波塔としての役割は終えたものの、間違いなく今も日本の首都、東京のシンボルタワーである。

江戸時代、この東京タワーと同じ役割を果たしていた建造物があった。増上寺の五重塔だ。その塔が建っていた小山は、今は半分削られホテルの敷地となっている。

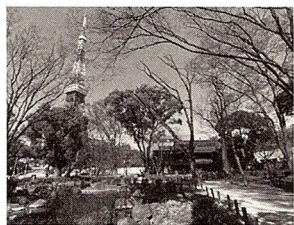
この五重塔、東海道品川宿を過ぎたあたりから見えたとはいえない。そして五重塔が徐々に大きくなる。

赤羽橋を渡り、五重塔を見上げるその足元には大きな池が。夏には水面を覆い尽くす蓮の花が咲く見事な蓮池が広がっている。そし

て蓮池のまん中には弁天様が祀られているお堂が浮かんでいる。その向かいには閻魔様が鎮座する閻魔堂。

五重塔に蓮池、そして弁天様と閻魔様、いい組み合わせである。火消しの「め組」で有名な芝の地元民にはもちろん、長旅を終えた旅人にとっても嬉しい憩いの場になった。この「さよが池」、または「ゆりが淵」とも呼ばれた蓮池は江戸名所の一つで浮世絵や版画の題材になっている。巻頭の当時の蓮池の絵を見ると、大人から子供、昼寝をする人、花見ならぬ蓮見で一杯傾けているの粋人、そして僧侶の姿も。

余談だが、五重塔は二代徳川将軍秀忠の供養塔で、こちらは下から眺めるだけ。徳川家の霊廟内に庶民が足を踏み入れられようもない。今でこそ増上寺は東京タワーとセットで東京を代表する観光地だが、当時の増上寺は



宝珠院から見上げる東京タワー。
好立地のお寺である

徳川將軍の菩提寺、つまりプライベート寺院であり、その豪華絢爛だった靈廟には徳川家と僧侶しか入れなかった。

さて、この庶民の憩いの場、蓮池の弁天堂とともに建立されたのが、今回訪れた三緑山宝珠院だ。創建は一六八五（貞享二）年、増上寺第三十世靈玄上人が建立した。江戸の頃の様子を前頁の名所図で確認いただきたい。

絵図の手前が赤羽橋で右手に五重塔。今の東京タワーは左手奥になる。右手に蓮池。中之島の弁天堂へは太鼓橋を渡ってお参りする。そして、宝珠院は左手前に見え、左端中央に寶珠院の文字が書かれている。

令和初の御朱印に長蛇の列

江戸時代、徳川家の菩提寺として飛躍的に発展した増上寺、かつての境内は二十万坪を超えていた。現在の芝公園一丁目から四丁目

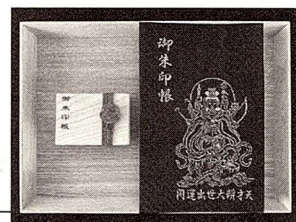
が旧境内で、そこに五十近くの塔頭寺院が立ち並んでいた。今では二十九か寺となったそうだが、それでも多い。大寺院は全国各地にあるが、江戸時代もそして現代でもこの塔頭寺院数は特別のようだ。

宝珠院もその一か寺で、かつては蓮池と道をはさみ、閻魔堂や鑑蓮社と並んでいた。現在蓮池の奥に移っている。ちょうど蓮池の奥の茶店のあたりである。

しかし時が流れ、増上寺も戦火で消失、あたりの景色は一変した。名所だった蓮池も、今は蓮の無い普通の浅い池になってしまった。赤羽橋からこの弁天池までは、東京タワーを背景に桜を楽しむ人気のお花見スポットになつてはいるものの、この池がかつて江戸の名所だったと知る人はほとんどいないに違いない。

しかし、その弁天池に長い行列ができた。

人気の御朱印帳とブレークの予感という豆御朱印帳



その頃はまだ建て替え中でプレハブ作りの仮本堂だったが、宝珠院の御朱印目当ての参拝者で、行列は蓮池に沿って公園内を蛇行し、五重塔のあった場所、今のホテルの入り口まで続いた。その長さ、およそ四百メートル。

「NHKからの取材を受け、夜の七時のニュースで当院の御朱印が紹介されたのですが、翌日の朝一から列がではじめ、あつという間に長蛇の列に。最後の御朱印をお授けしたのは夜の九時を回っていました」とは宝珠院第二十三世森俊人住職。

平成から令和へと元号が変わる時、新元号初の御朱印としてテレビで紹介されたのが、宝珠院だったのだ。

当時の御朱印ブームもあり、毎日列ができる人気となった。その後、新本堂が完成するまで御朱印人気は続く。新型コロナウイルスの影響は大きいものの、ツイッターやネット

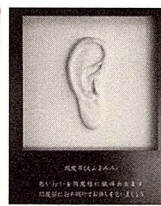
での紹介やお授けもあり、宝珠院の御朱印人気は今も衰えていない。

さて、その理由は？

現在、宝珠院の御朱印の種類は何と三十種類に届くほど。弁天様、閻魔様、阿弥陀仏、薬師如来の四仏が新本堂に並んでいるが、その四仏をベースにし、バリエーション御朱印、さらに季節やイベントなどの限定版が加わっていく。そして、御朱印と一緒に御守りも勢揃い。

工夫に工夫を重ねた御守りがなんと三十七種類。すごい、というか驚くばかり。しかもどの御朱印も御守りも、そして朱印帳もセンスがいい。どう表現したらよいのか、授与品に垢抜けているという表現はおかしいかもしれないが、どこことなく都会的でスタイリッシュなのである。

そうか、このお寺は御朱印寺、御守り寺か、



罪の告白ができる閻魔様の耳。三すくみの蛙、蛇、ナメクジを探す趣向と、森住職の遊び心が楽しい

という思いを浮かべながら話を伺っていると、「これからは豆御朱印が流行ると思います」と森住職が見せてくれたのが、縦五センチ横八センチほどの小さな御朱印帳だ。

「従来の御朱印帳は女性が普段から持ち歩くには少々大きくて重たいようです。その点、この豆御朱印は便利です。もちろん御朱印を授ける神社仏閣が対応しないといけません、いずれはこの豆御朱印が増えていくかもしれません」

うーん、ただのお坊さんではない。トレーニングドウォッチャーで、マーケティングに長けた実業の人ではないか。経歴を伺わなくては。

大連で食堂経営した学生起業家

森住職は一九七〇（昭和四十五）年六月、神奈川県川崎生まれ。現在住職を務めている宝珠院の先代住職夫人の姉の次男だった。つ

まり先代住職の甥にあたる。

父は会社経営者で十歳上の兄は後継者として育てられたという。そして、子供の頃には親戚だった宝珠院にもしばしば遊びに来たが、閻魔様に舌を抜かれるぞ、とおどかされると「もう来ない！」と泣きべそをかいていたそう。長じて神奈川県私立大学法学部へ。そして、大学二年になった時、これから学ぶべき外国語は中国語だ、と大連大学へ語学留学する。

その留学中、父や兄の会社経営を見ていたからか、日本食の食堂経営を思い立つ。大連に日本人は多いものの日本食の店は少ない。確かに自分も日本食が食べたくないと決まってホテル内の日本食レストランへ。なぜなら日本で食べる日本食と遜色ないからだ。

「よし、このシェフと組もう！」そう決めると早い。翌日には六歳年上のシェフを口説



旧本堂の頃から御朱印と御守りを授けていた

いて帰国。

「大連で日本食のレストランをやってみよう。開店資金を貸してほしい」と父に申し出る。失敗したら即時帰国、日本の大学への復学不可を条件に開店資金を貸してもらおう。

戻るや否や大連大学を休学し、大連の銀座通りともいえる繁華街のメインストリートから少し入ったところ、好立地の店舗を確保する。そして日本食のレストランを開店する。二十歳そこそこの起業だ。

オーダーメイドで日本風の内装に仕立てた三十席の店の名は「横浜ファーストフード」。お店を知ってもらうために、当時大連ではなかった店名入りのポケットティッシュを自ら配った。

これですぐにお客がつき、お店は大繁盛。連日行列ができ、わずか三ヶ月で借金の七割の純利益をあげる。そして、二店舗目、三店

舗目と展開。二年目の最後に四店舗目を開店した。しかし、本業は学生である。後ろ髪は引かれながらもすっぱり帰国、学業に戻ることにした。大繁盛の四店舗は中国人シェフに丸ごと譲った。

そのシェフの宗さんから東日本大震災の直後に電話をもらったという。

「森さん、もし放射能で日本に住めなければこっちへ来たらどう。家族四人の渡航費用から中国での生活まで、僕が何から何まですべて面倒みるから」

森住職と宗シェフ、お二人の人柄が知られる話だ。

一転、実業の世界から寺院再建へ

さて、大連で大成功し帰国。大学も無事卒業し父の会社就職する。大連での実績が認められたのか、新部門の立ち上げを任せられ



弁天池では鶯の姿も見られる

る。二十七歳で結婚、学生時代から付き合っていた方で、この奥様のアイデアが御朱印やお守りをはじめ、お寺の隅々のちよつとした装飾やオブジェに活かされているという。

その奥様との間に二人の子供をもうけた。そして三十五歳で独立。通販事業会社を立ち上げ、営業に飛び回ったという。中国語会話を活かし中国の工場とも提携。様々なTVショッピングの商材を企画製造するモノ造りの道へ挑戦する。

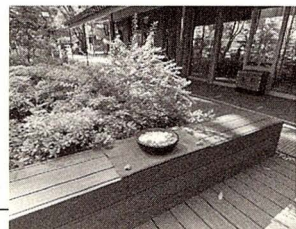
そんな中、叔父である住職が突然遷化、三十八歳の時に宝珠院の後継者、つまり浄土宗の僧侶になってほしいという話を持ち上がる。叔父の護ってきた寺であり、しばしば訪れてきた親戚の家でもある。仕事はあるものの断る理由もない。幸い会社務めではなく、会社経営者なので、仕事を続けながら僧侶の道歩むこともできる。では、と決心する。

そして、三年間にわたる修行を終え僧侶の資格を取る。が、いざお寺に入って驚いた。墓地を持たない宝珠院の寺院収入は閻魔様と弁天様の祈願だけ。叔母が習い事の先生をして支えて続けていたのだ。

「正直、驚きました。よくやってこられたというのが本音でした」

森住職が僧侶資格の勉強中、東日本大震災で宝珠院の本堂と閻魔堂の屋根が壊れ、ブルーシートが被せられた日々が三年以上続いた。森住職は財源ゼロ、いや、マイナスから新伽藍の建立、そして、その後の寺院運営と、これからの宝珠院のあり方を担うことになった。

最初に取り組んだのが、御朱印と御守りの授与。それまでも授与していた弁天様と閻魔様の御守りと御朱印をリニューアル。そして次が樹木葬の墓地造営。



境内の隅々に気が配られている

それまで墓地がなかった宝珠院に期限付きの墓地を作ったのである。見上げれば東京タワーが見える墓苑。しかも最終的には合葬を前提とし、ステンレス管による個別埋葬とし、一人用、二人用、四人用の墓を作る。二人用からはペットも一緒に入れる墓も作り、時代のニーズを捉えた。

そしてブームを逃さず、御朱印と御守りにも力を入れ始める。通販に携わった経験からネットやWebをフル活用。洒落たホームページにも立ち上げる。各種SNSも揃っている。まさに新生宝珠院の誕生だ。

「実業の世界が長く、その経験を活かしたのですが、これが信仰を基盤とする寺院運営でいかなものか、正直、そんな思いは今もあります。」

ですが、寺の維持運営にも経済基盤は必要です。この二つをうまく融合させていくこと

が、今の、そしてこれからの宝珠院には必要なことだと割り切っています」

聞くと増上寺境内に残る塔頭寺院は檀家の少ない寺院も多く、芝公園という立地を活かしている寺院も少なくないそうだ。現代のニーズに応える樹木葬のある御朱印・御守り寺に何の問題もないように思える。

最後に次なる展開を聞いてみた。

「そうですね、場所柄キッチンカーが気になっていきます」

なるほど、江戸庶民の憩いの場であった蓮池が時を経て、令和ならではの憩いの場を目指す、ということだ。閻魔様も弁天様もきつと喜んでくれるに違いない。



宝珠院HPのQRコード <https://hoshuin.jp>

蝦夷地布教の拠点・ 有珠善光寺

長野の善光寺式の一光三尊阿彌陀如来像が祀られている



『お寺の日本地図 名刹古刹でめぐる47都道府県』著者
鵜飼秀徳の
寺々刻々

コロナ禍にあった昨年、私は47都道府県を回って取材を続けていた。その果実として先般、『お寺の日本地図 名刹古刹でめぐる47都道府県』を上梓した。

本書は京都であろうが、奈良であろうが、あえて「1か寺」を選び、その歴史と地域性などを紐解いたものだ。お寺のセレクト基準は、県民性をよく表した古刹であること、地域信仰のエポックになった寺院であること——などである。まんべんなく寺院を俯瞰することで、「寺とは何か」「日本人とは何か」を浮き上がらせることを本書の目的としている。

そのうちのひとつ、歴代住職が命をかけて信仰の根をひろげようとした浄土宗寺院を紹介したい。

北海道伊達市の有珠善光寺だ。有珠善光寺が正式に開かれたのは江戸時代後期のことである。当時、北海道は「蝦夷地」と言われ、アイヌが暮らす土地であった。そこに幕府の蝦夷地政策を背景にして、和人の寺が進出することになった

1804（文化元）年、徳川幕府11代將軍家斉が有珠



創建当初の面影を残す有珠善光寺の本堂と庫裏

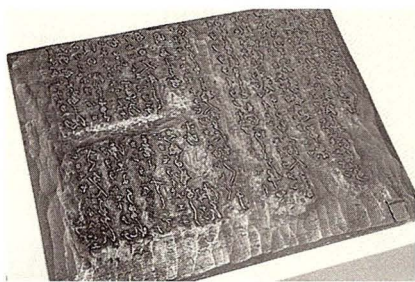
善光寺を含めた3か寺を、幕府直轄の官寺に定める。蝦夷地におけるほかの官寺は、天台宗等澍院（様似町）、臨済宗南禅寺派の国泰寺（厚岸町）だ。

当時、ロシアが南下政策を始め、また、蝦夷地の周囲に外国船などが頻繁に訪れていた。三官寺の建立は、先住民アイヌへの布教や蝦夷地に赴任して亡くなった幕府役人や和人の供養をするためである一方で、蝦夷地は日本が実効支配する地であるとして諸外国へ牽制する意味があったのだ。

有珠善光寺の整備にあたっては、江戸の増上寺が主導権を握った。増上寺末の京都・丹後本願寺の住職莊海に白羽の矢が当たり、有珠善光寺の開山上人として当地に派遣されることになった。

増上寺は必要な仏像、経典、仏具などの提供など、できる限りの後方支援を約束したが、当時の和人にとつては北の大地はあまりにも過酷な環境であった。

莊海は蝦夷地を目指す途中で行き倒れ、有珠にたどり着くことなく死亡する。替わって、小石川・伝通院の



アイヌの布教用に彫られたお経の版木

蝦夷地へ遠征する時の御用旗



僧鸞洲（らんしゅう）が二世として入ることが決まった。鸞洲は病気の母を抱えていることを理由に固辞したが、本山の命令ではそれも適わなかった。蝦夷地に入ることにはそこに骨を埋める覚悟が必要であり、また、当地では有珠山の噴火がしばしば起きていたため、善光寺住職への就任は命がけの使命であったのだ。

この頃、清涼寺式釈迦如来立像をはじめ様々な仏具と一緒に持ち込まれた。蝦夷地を行き来する際には日の丸をつけた御用旗を掲げた。御用旗を持つ者は「幕府の特使」であり、宿泊などで何かと融通が効いたという。

有珠善光寺に住持することは、すなわち、過酷な自然環境と対峙することを意味する。

寺が開かれてほどなく、1822（文政5）年に有珠山が大噴火する。地元の蛇田コタンは全滅。死者103名を出す大惨事になった。有珠善光寺も被害を受けたものの全壊は免れ、寺の役僧らが村人の救出活動にあたったとの記録が残っている。19世紀にはもう一度、有珠山が大噴火し、寺は避難を余儀なくされている。

円空も蝦夷地に入り、
当地で仏像を彫った



清涼寺式釈迦如来立像



うかいしゅつとく、1974年京都市生まれ。大学卒業後、新聞・雑誌記者を経て2018年にジャーナリストとして独立。「仏教界と社会との接点づくり」をテーマに活動が続ける。最新刊に「お寺の日本地図 名刹古刹でめぐる47都道府県」(文春新書)。東京農業大学・佛教大学非常勤講師。一般社団法人「良いお寺研究会」代表理事。京都教区正覚寺住職。

こうした有珠善光寺の歴史は、様々な寺宝とともに同寺の宝物館で学ぶことができる。とくに興味深いのはアイヌへの布教に関する史料である。

アイヌは文字を持たない。そこで3代目の住職弁瑞は、お経の意味を歌の形に仕立て、歌の横にアイヌの発音をかたかなで附した板本をこしらえて印刷した。アイヌに、和人の文字と仏教を教える教材にしたのである。

現在の有珠善光寺の本堂と客殿とは棟続きで、傾斜の大きい茅葺き屋根が特徴だ。これは創建当時の面影を伝えるもので、度重なる有珠山噴火にも耐え、修復を重ねて現在に残る、生き証人である。境内に立つと、懐かしさが感じられる佇まいである。枝垂れ桜や八重桜の古木も残る。きっと、故郷に思いを馳せる原風景を、多くの和人がこの寺に求めたに違いない。

コロナ禍の時代において、寺の存在は光る。辛い境遇の人々の心を落ち着かせ、社会の安寧を保つ機能が寺だ。時代や場所は違っても、有珠善光寺のような存在であり続けるのが、地域の寺の理想だと感じた。

授かりし 知智慧

倉田百二

くらた ひやくぞう（ももぞう）
1891年広島県生まれ。日本の劇作家、評論家で大正、昭和初期に活躍した。代表作は「出家とその弟子」。『浄土』には本稿をはじめ全4回寄稿されている。1943年没。

みだぶつと

いふよりほかは津の国の

なにはのこともあしかりぬべし

法然上人の法歌と伝えられているもののうちでは私はこの歌が一番心に沁みる。

この歌にしみ出る宗教的の心境は練りにねって、澄み切った念仏の生活の味わいだ。それが歌の調べともよく合って、言い知れぬ趣があらわれていると思う。

結局はこうした生活法、「世の渡りざま」となることが念仏の生活の一番深い境地であり、ここまで達せねばならぬのだと思われる。これが本当の宗教的叡智ともいうものであり、私はこの智慧を法然から授かったことをつくづく報謝したい気がする。

法然上人を鑽仰する人たちは、よく法然の一生をかけての深き心に会し、自分の生活の心ぐみがこの歌の心と同じになっているかどうかを省みるべきであろう。そうなっていないならまだ到らぬのである。時としては法然を鑽仰しつつも日々の暮らし様はこの歌とは

あまり似つかぬ、あらぬ方に外れていないとも限らないからである。

私はかたく信ずる。この歌とひとつ心になって生きること、これこそ上人の心に一番適う道であるということを。

一代の法をよくよく学すとも、みだ仏というよりほかの事をあげをすべてを揚棄せねばならぬ。必要があり便宜のために色々と事をあげすることはあっても事あげそのものはありのすさびに過ぎないのでなければならぬ。

「此の世の渡りざまは念仏の申されん方に過ぐべし」

同じ心を指導原理の形として法然はこうも言い表している。

愚かには似るが、私は活ける信仰を求めつつ法然を慕って、まだしかと掴み得ぬ嘆きを

持っているかも知れない人々のために少しく手引きをしてみよう。

宗教生活はひとすじ道になるためだ。無二無三とはこのことだ。生活の複雑と多岐と矛盾の中からひとすじの白道を見い出してひらすら歩いて行くためだ。

それには端的に言つて是非と得失とを放下して念仏の一念につかねばならぬ。こうした方が善いとか、悪いとかいう考え、こうした方が利であるか、損であるかという事で、普通には物事を決めているのであるが、そうすることを止めて、こうした方が念仏が申されるというように決めるのである。これが念仏三昧の生活である。是非と得失ではなく、念仏が申されるか否かを関心事とする。こういうのは非と失とを選べというのではない。人情の自然としてわざわざ悪と損とを好むもの

はない。そうした無理をして念仏が申されるものではない。素直に自然にというのが宗教の心だ。けれども善と利とを必ず求めようとするとところに念仏はない。それらは必ず得られるとは限らないものだからだ。善と悪との弁別のいか程虚しく、人間の心を熱悶させるかは知る人は知っている。利害の判断は尚更だ。この二つのはからいがあつては所詮人間の心は清涼にはならぬ。

本当の平和、——涅槃というものは来ない。実にこれは人間の迷いである。善と利との追求が人間を幸福にしてくれるであろうというのが我々の最大の迷いなのである。

念仏の生活はこの迷いを捨てて、念仏申さるるの善、あの親鸞が「念仏にまざるの善なければなり」と言つたあの大善を求めるのだ。念仏申さるるの利、あの白隠が「瓦礫を以つて黄金に換えるもの」と言つた大利を求める



法然上人絵像・忍海筆（東京 最勝院蔵）

のだ。ひたすらに念仏申さるる法悦につくのである。その時初めて相對、二枚のはからの生活を脱して絶対一枚のひとすじ道に出ることが出来る。道がひとすじであることは何たるすがすがしさ、ひたむきさ、強さであろう。

念仏申さるるように万事を決めて生きて、そこに自ずからあらわれる善と利とを素直に受ければいいではないか。かくしても人間生活に避け得られぬ悪と害とをば素直に忍受するのだ。悪と害との忍受なき「幸福なる生活」を求めようとするのは存在せぬ宝を探し求めるものである。ただ南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と申して生きる。最も活々と、余念なく、自然に旺盛に、充実に唱名されるようにと、その心がける。その他に善悪得失のことあげは「津の国のなには」の事も邪道なのである。この指導原理を以って現実生活のすべ

てに処していくとき、念仏の生活であり、法然上人の心に一致するものだ。

かくいうのは、商人ならば商売のことはせず念仏申せと言うのではない。彼処に店を出そうか、出すまいか、それには色々な事情、詮じつめれば是非得失を考えずにやれる筈はない。端的に言えば、商売である以上、儲かるか、儲からぬか、算盤を弾かずにやれる筈はない。それはやつていい。しかし究極に於いて、儲かるから店を出すのでなく、出した方が念仏申されるから出すのでなくてはならぬ。念仏申されぬなら、儲かっても出さぬというようになっていねばならぬ。念仏申されるなら借金を棒引きせよ、また何処までも催促せよ、申されぬならどちらもすな。いずれにせよ、本人の心の内はいつも念仏の心境でなければならぬ。無理非道をして念仏申され

るものではない。しかし心にもない譲歩をして、闘うべき時も闘わずにいて、心のうちに充実した輝きがあるものではない。念仏申さるる心の有様は活きた、輝いたぬれた情態である。念仏申さるるなら闘え。また念仏申さるるならどんな犠牲でも忍べ。無理な闘いをしても、また心にもない犠牲を払っても念仏申さるるものではない。心が死んでおり、乾いており、傲っているからだ。

人間の生活はひとすじ道にならなくては、充実し潤いまた力がでるものではない。相對二枚の是非得失ではからって生きるなら、心はあせり事務的になり、ためらいつつすべてをせねばならぬ。人を救うにも、また享樂するのにも打ち込んでひらすらに出来ぬ。

ためらいつつ享樂する、何たる悲しむべき事であろう。弓なりの空を、花咲く樹を、美

しい女を、時には一杯の酒をさへ全くの放れた心で享け樂しむのは生まれたものの權利である。そしてこの權利は何処から来るのか。念仏から来る。そうするのが善いか、悪いか、得か損かのはからい以上の、絶対境から来るのである。許された生活、全く解放された生活とはこれを言うのである。

解放されるには、善悪から解き放たれたただけでは駄目だ。利害から放たれねばならぬ。利を追うために、邪魔物になる道徳を捨てて、悪事でも何でも利になればいとわぬ、という心は念仏の心ではない。利でも、損でも念仏申されさえすればいいとならねばならぬ。必ず利が欲しいのでは涅槃はあり得ない。それは利に束縛されているからである。

ひたすら念仏申さるるように生きて、それに伴う限りの善と利とを素直に享けるのが信

仰の生活である。悪も害ももとより忍受するのだ。たとえ今夜生命を失うとも忍受するのだ。全財産を失うとも忍受するのだ。また大悪を犯すいきさつとなろうとも忍受するのだ。そうした大覚悟なくして、信仰生活を求めようとするなら、それは出来ない相談である。ひたすら念仏に生きるとはそうした心ぐみの生活であつて、みだ仏というより他は「津の国のなには」の事も捨ててしまわねば法然上人の心境にはなれぬのである。念仏は易行道と言つても、この是非得失の捨離なくして一切の宗教生活はあり能わぬ。はからいの難しさ、思慮分別の知解が要らぬから易行なのである。念仏よりも善と利を愛しつつ念仏の生活が出来る筈はない。そして、是非得失を捨ててゐることは実は大死一番である。世間普通の娑婆の心構えを捨てることである。この否定と世間の心理なくして生の肯定と世間の宗

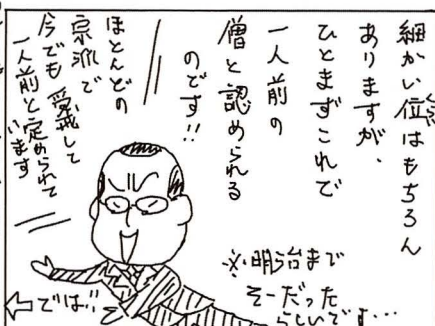
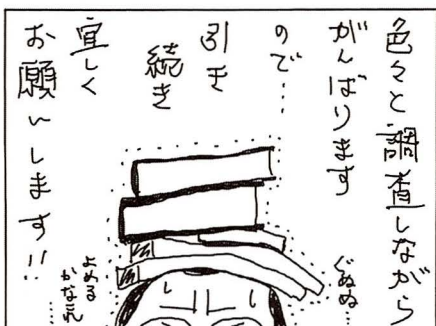
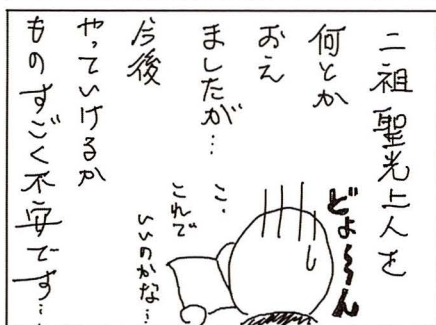
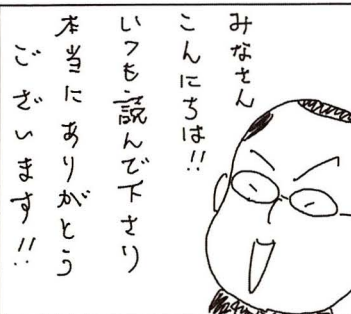
教を説くものは、宗教から逸脱したものだ。したがつて心の平和、涅槃というものが、そうした態度から得られるわけではない。

是非と得失とを一度捨てさつて、ひたすら念仏申さるるように生きるひとすじの道に立つこと、これが浄土門の生活法である。かくしてこの世の「よし」「あし」と「損」と「得」とはそこに伴つてあらわれる自然法爾の如実を素直に受けるのである。

これが善き人法然上人から授けられた智慧であり、これは阿波之介にも、上人にも、私にも通じてひとつなるみ仏のたまものにならぬのである。(一九三六、六、九)

新シリーズを前にひとまず

御礼!!



時は建久9年
(1198)...

石見国いのしゝくに...
おみさま
伴氏といわれる

貴族の
奥様か、
かられました。スア
スア...

ある日お休みに
なっていると...

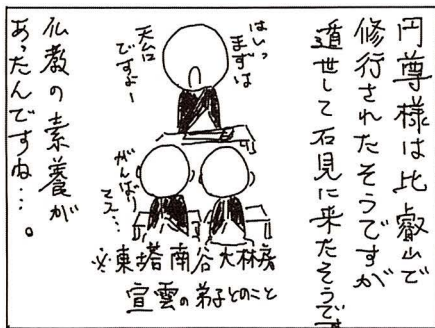
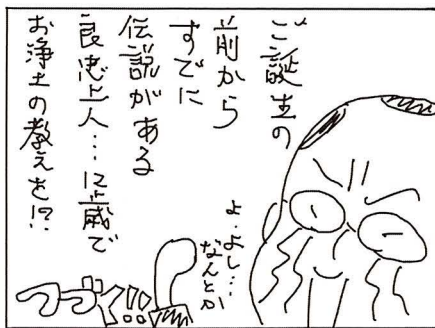
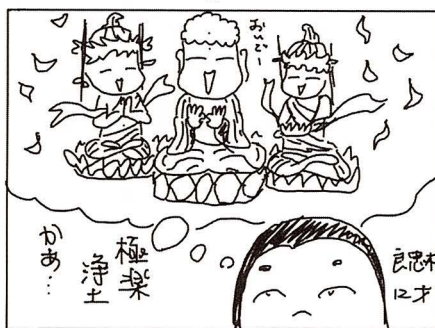
[illegible]

天女のこころ
美しい方の
夢を見たい
きんぎょ...

キラキラ

浄土宗のお祖師様
その2
良忠上人
第2話

くんじまん 1978年千葉県生まれ。浄土宗のお坊さん





誕生寺・歴代住職に 想いをさせて

本年4月7日付で誕生寺35世住職に就任いたしました。旧姓は安田といい、生まれは青森県です。

誕生寺歴代住職を調べてみると、私と同じ東北出身は山形県寒河江生まれの第22世勝譽正道和尚がいます。正道和尚は9歳から修行をはじめられた方で「毎朝2時に起き、夜遅くまで念仏を唱え。真夏には法衣を脱がず、真冬には火にあたらず作業

をしていた」と記録があります。16歳の時、増上寺で本格的に僧侶としての道を歩むのですが、正道和尚32歳の時、父・安倍伊兵衛が手厚い看病もむなく往生したのでした。

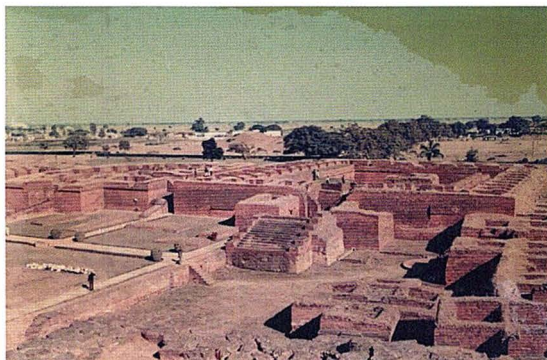
みんなの 境内

私も、7年前4月7日、32歳の時に縁あって誕生寺に來ました。正道和尚と同じ東北生まれの僧侶が誕生寺と「縁」を持つとは、正道和尚も私も夢にも思っていませんでした。正道和尚は60歳で遷化しております。私も、正道和尚と同じ年齢までは頑張っていきたいと思っています。今の誕生寺の境内は昨年の新型コロナウィルスの影響もあり、「静けさ」が漂っています。寂しさもありますが、ある意味これまでは意識しないと聞けなかった鳥の鳴き声や風の音や草木が風でゆれる自然の音を耳にする事ができます。そんな中での念仏はこれまでとは違いどこか新鮮です。コロナ禍によって「失ったもの」もあれば「再発見できたもの」もあるような気がします。静けさを求める方は、どうぞ足をお運びになってください。

インド渡航歴40回超!

佐藤良純の No. 12

インド・釈尊あれこれ紀行



今も残るナーランダの寺院の遺跡



ナーランダにある三蔵法師博物館



三蔵法師博物館前庭に立つ玄奘三蔵像。
右は中国の高昌故城の玄奘三蔵像。

ナーランダ僧院と 大学

ワラビ、ナールンダ、オードンタブリ、マ
イナマテイ。13世紀に栄えていたこの4箇所
の僧院は偶然かもしれないが同一の緯度にあ
る。ここでは確かな記録のあるナールンダと
ヴィクラマシーラ、そして現在のバングラデ
シュのマイナマテイ遺跡について歴史、建築
物を取りあげたい。

どちらの僧院も釈尊の指示に従い、托鉢の
ため、街中でないが街から遠過ぎない郊外に
建てるとの方針を守っている。

僧院は大規模な修行、教育、学術研究の総
合研究施設で、それを社会的、経済的に支え
るために多くの在家信者、そして多くの農村
や街に住む人々の力が必要であった。

ナールンダ僧院は、中国僧玄奘三蔵の文獻
によるとマウルヤ王朝のアショカ王が紀元
前3世紀に建てたと伝えられる小さな祠堂を
その始まりとするが、5世紀のグプタ王朝の

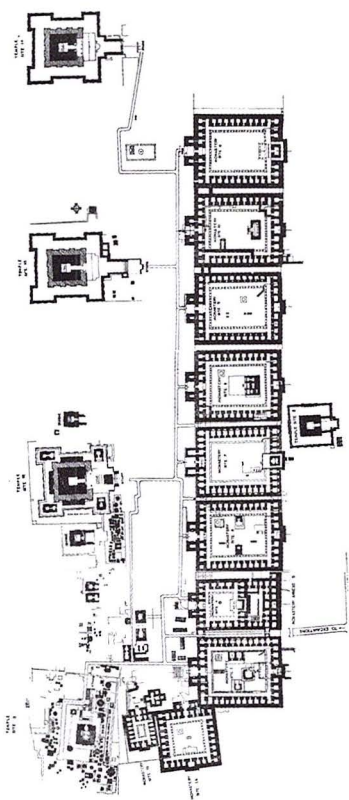
銅板刻文、コインなどが発掘されていて、こ
の時代の建立と思われる。

また、7世紀のハルシャ王朝の戒日王が造
られた銅製の仏像も見つかっていて、この時
代にも仏教保護に力が注がれ、100余の村、
200余人の村人たちが僧院を支えたと伝え
られている。この時代に僧院に長期滞在した
中国僧義浄も、その著書の『南海寄帰内法伝』
で、「学ぶ学僧3000人を200余りの村民
が支えていた」と記している。著名な学者、
龍樹、世親、無著もここに学び、後に多くの
僧侶の教育、育成にあたっている。仏教史跡
ツアーで必ず訪れると言っているナールンダ
は、まさに仏教が発展した聖地である。

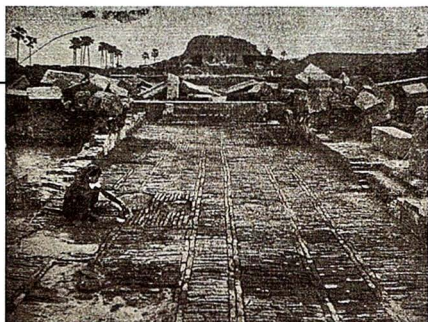
ナールンダ僧院の東、車で5時間程のガン
ジス河の南岸、アンティチャックの町の近く
にヴィクラマシーラ僧院の遺跡が残っている。
この僧院は玄奘三蔵の記録に無いところか



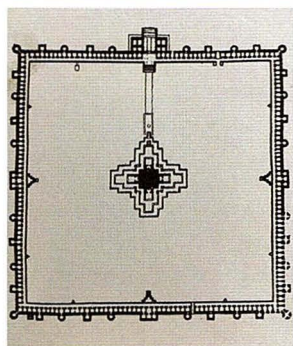
広大なナーランタ寺院と僧院



ナーランタ寺院と僧院の見取り図（一部）



1984年に撮影したナーランダ遺跡の
前での一枚。左端が筆者



ヴィクラマシーラ僧院のみ
とり図。四隅に飛び出ている
のが塔である

佐藤良純

大正大学名誉教授

さとう・りょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学
同大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より大
正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退
職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和
38年、以来インドへ訪れること、40有余回。著書に『ブッ
ダガヤ大菩提寺』、『釈尊の生涯』など多数。

ら、9世紀から13世紀のパラ王朝、ダルマ
パーラ王によって建てられたと思われる。こ
の僧院では仏教学、哲学、論理学、文法学な
どが教えられ、ジタリ、アティーシャなど
の学者が活躍した。僧院の遺跡は30^{メートル}四方、
208の僧房があり、正方形僧院の四隅には
15^{メートル}の塔が立つ。僧院の基壇の高さは2.2
5^{メートル}と高い。8世紀から12世紀に造られた各
種仏像、観音像など、ヒンドゥー寺院、チベッ
ト寺院に祀られるものも多い。

バン格拉デシウのほぼ中心コミラの町に近
い丘陵にあるマイナマティ僧院の遺跡は6世
紀から13世紀の遺跡が見られるが、中心とな
る僧院は13世紀パラ王朝の時代に建てられ
たと思われる。ただ、寺院は異なった3層が
見られるところから、増築が重ねられたよう
で、7世紀から13世紀の間栄えていたと思わ
れる。

「寺々刻々」著者、鵜飼秀徳師の近著紹介（編集部）

本誌の好評連載「寺々刻々」の著者、鵜飼秀徳師が面白い切り口のお寺の本を出版した。日本全国にある寺院だが、「お寺がわかればその土地がわかる」と、地域性や歴史を表している特徴的な寺院を全国47各都道府県からそれぞれ一か寺を選び取材している。

全国の寺院を俯瞰する中で「寺院とは何か」「日本人とは何か」という著者独特の「寺院学」視点が面白い。また、登場する寺院を10か寺参拝していたら寺院通と著者は言う。果たして皆さんはいかがだろう。



『お寺の日本地図 名刹古刹でめくる47都道府県』文春文庫 新書版320ページ

月刊『浄土』をロックミュージシャンが！ 郡嶋昭示（千葉・松戸 常行院住職）

みんなの 境内

新型コロナウイルスの影響で、開催が延期になった当山の花まつり音楽イベント。出演をオフアールしていた歌うたい花男さん（太陽族ヴォーカル・太陽族活動休止中もソロで歌い続けている）が、ご自身のラジオ番組、FMおたる「花男の湯」に私を電話出演させて下さいました。そこで常行院の花まつり、この『浄土』の連載漫画の話になりました。その後、月1（2days）の配信ライブ「銀河ツアー」では、月刊『浄土』を宣伝して下さいましたよ!! ご報告！

注目！浄土宗檀信徒が出版する浄土宗の入門書

（編集部）

京都の名刹、檀王法林寺の檀家である黒田峰月氏が浄土宗、そして菩提寺を知るための本、『月影のいたらぬ里はなれども』を出版している。今回出版されたのは全3冊の中巻で、經典解説と作法の説明、檀王法林寺の来歴等となっている。

納得のいくお念仏の世界を知ってもらおうと、檀信徒の目線で易しく詳しく解説しており、従来の出版物とは一線を画している。販売されていないが、今回残部をお分けしていただける。ご希望の方は編集部に。



既刊となっている2冊。ともにA5版で上巻196ページ、中巻304ページ

式内親王
遺文子

連載
小説

その
3

石丸晶子
絵 啞々砂



いしまる・あきこ 1935年東京生まれ。
東京大学文学部、同大学院博士課程修了。
近代文学を専門とするが、日本古典の著作
も多く、1991年、『式内親王伝（朝
日新聞社）で紫式部文学賞を受賞。東京経
済大学名誉教授。著書に『お手紙からみる
法然さまーそのお人柄』、短編小説『月
影の使者』（ともに浄土宗出版）など多数。

恐ろしい時代の波が、私を世情に対して過敏にさせていた。齋院退下後も貴族社会との交わりもせず、逼塞した暮らしであつたけれど、侍女たちを通して私に伝えられる社会の動きは早かつた。周囲の誰もが時代の動きに敏感になつていた

年が明けた治承四年（1180）二月二十一日、まだ三歳（満1歳2か月）の幼子であられる言仁親王が、御父高倉天皇の讓位によつて安徳天皇として踐祚され、四月二十一日、即位礼が行われた。

言仁親王と申しあげた時代から、宮中で行われる新春年賀の儀式などで私は何度か安徳天皇にお目にかかつてきたけれど、非常に聡明でまた実に愛らしい幼子であられたことを思い出す。幼い天皇の政治を事実上執り行つたのは外祖父の清盛であつた。

優れた器量をもちながら親王宣下もうけられず埋もれ木として不遇をかこつていた弟以仁が、全国にひそむ源氏に対して、平家打倒をうながす令旨を源行家にもたせて秘かに旅

立たせたのは、安徳天皇即位式の十日あまり前の四月九日であつたと思う。

そして五月十五日、以仁を平家に密告する者がおり、平時忠率いる軍勢が三条高倉第を包囲する直前、弟は邸を女装して逃れ園城寺へむかつた。以仁とは住む棟が違うとはいへ、同じ三条高倉第であるから、この弟が隠れているのではないかと疑われ、私が住む棟にも多数の平家の武者たちが乱入してきたときの恐ろしさは忘れられない。彼らは私がまとう桂や長袴の下に以仁が隠れているのではないかと疑い、侍女に私の衣装を叩かせた。

以仁自身はぶじ園城寺に逃れ着いたけれど、さらに興福寺の僧兵にも拳兵をうながそうと南都へむかう途中、平家の流れ矢で戦死したという。

振り返れば、この以仁の事件が、今は治承寿永の乱とよばれて平家が滅亡する合戦のはじまりであつた。

凄まじい乱世が、言語を絶する殺戮の歳月が、はじまったのである。

六月、清盛が突如、高倉上皇と平家一門の反対をおしきつて、都を福原（現在の神戸市）へ遷すといいだした理由を私は知らない。ただこの計画には相当の無理があったらしく、わずか五か月後の十一月には都は洛中にもどってきた。

この年八月、伊豆に流されていた源頼朝が挙兵しており、信濃では木曾義仲が、甲斐では武田信義が挙兵していて、洛中騒然とするなかでの再度の遷都であった。

清盛の嫡孫維盛（これもち）を総大将にした平家が大軍をひきい、東国へむかったのはこれら一連の大騒動で都が動揺をかさねているさなかである。そして同じ年の十月、富士川の戦いで敗走した維盛の軍は、わずかな兵となつて都にもどってきた。維盛のこの不始末に清盛は激怒したという。

これら一連の大騒ぎのなかでの福原遷都であり、洛中への遷都であった。

都を福原から京に還都させた清盛は、翌十二月、前年から鳥羽殿に幽閉していた法皇後

白河の幽閉を解き、法皇が政治をおこなうよう院政の復活を要請した。

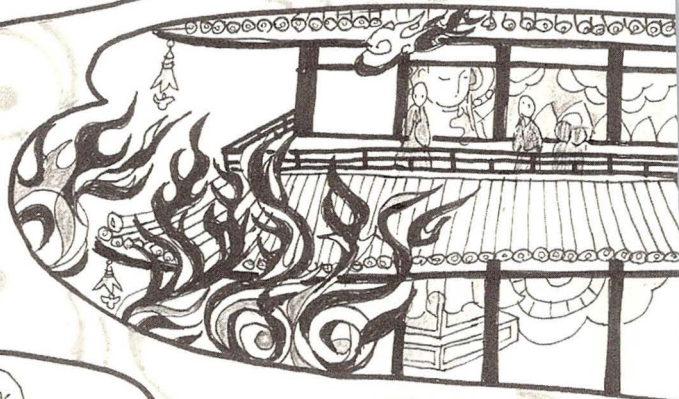
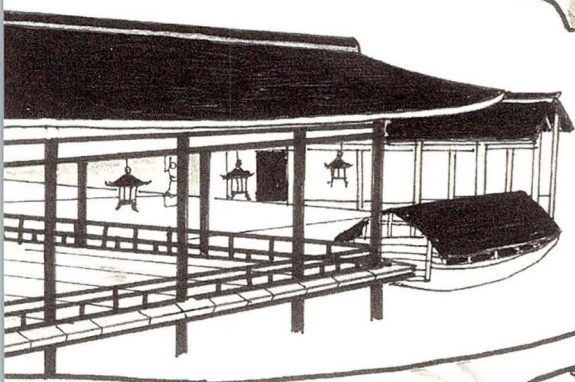
清盛の五男重衡（しげひら）ひきいる軍勢によつて南都（なんと）が攻撃され、興福寺・東大寺大仏殿はじめおおくの堂宇が焼亡。多数の男女が阿鼻叫喚のうちに焼死したのは同じ年の十二月二十八日である。

何ということであつたろう。洛中、というより天下が騒いでいるこのただなかの翌治承五年（1177年、養和元年に改元）一月、高倉上皇が崩御され、つづいて閏二月、大相国清盛が逝去したとは！

当時の上を下への大混乱と大騒ぎはここにするすまでもないと思う。

法皇寵愛の建春門院平滋子皇太后を、お二人の間の皇子高倉天皇を、清盛の長女平徳子中宮が高倉天皇との間に生じた安徳天皇を、擁して平家が繁栄を重ねていたこの年月、先にも記したけれど、師父のみ弟子法蓮房信空様は平家中枢の方々に近い血縁であつた。

清盛の妻時子（ときこ）の弟時忠（ときただ）が「平家にあらずん



ば人にあらず」と豪語している話はあのころ侍女を通して私も聞いていたけれど、この時忠の妻で自身平家の血をひく領子^{りやうし}が、法蓮房様の叔母でありまた法的には姉であった。

領子の母は平家の娘で、これによって平滋子皇太后には、この御方がまだ後白河法皇の女御^{にようご}（妻の一人）であつた時代から、領子は滋子女御様付き女房として宮中にながつていたのである。

この女房領子^{にようぼう}は、滋子様の兄である時忠と結婚したことによって、さらに平家中枢の人となり、高倉天皇のもとに清盛の娘徳子^{とくし}様が入内されたときには徳子様付き女房となり、言仁親王がお生まれになるとその乳母の一人として権勢をふるつた。

この領子とつながりが深い法蓮房様は、師父が叡山におられる頃から、都で権勢を誇る叔母であり姉でもある領子をおして、師父が叡山第一の学徳優れた聖であることを平家の方々に伝えておられたのである。

叡山を下りられた師父の草庵^{くわあん}東山吉水の山

裾に広がるのが、平家一門の本拠地六波羅^{ろくはら}であつた。吉水の草庵から眺めると眼下に、あの頃は榮華を誇つた平家の邸が薨をつらねて眺められたし、平家の人々にとってはすぐ東にある華頂山をふり返れば、その麓に眺められるのが師父の草庵であつた。

一門の人々が早くから、こぞつて師父のみ教えに接したというのも、この身近さもあつたと思う。

清盛の嫡男重盛などは早くから師父のお導きを仰ぎ、檀越^{じふあん}となり、承安五年（1175）に師父が新しい夜明けをお迎えになつてからは、お住まいの六波羅小松殿^{ろくはらこまつどの}では阿弥陀仏四十八の御誓願にならつて四十八間の仏間をつくり、そこに一つずつ四十八の灯籠を灯して四十八人の美しい女を配し、四十八日間の念仏を、自身はもとより周囲の人びとにとなえさせた。そこであのころ、世の人びとは内大臣であつた小松殿重盛のことを「灯籠大臣^{とうろうだいじん}」とうわさしたという。

法蓮房様と平家一門との繋がりによつて、

師父のみ教えが平家に広まったのは早かったのである。そして一門の人びとに広まったということは、それにつながる貴族たちや、彼らに仕える男女にも伝わるということに他ならなかった。

こうして師父が新しく切りひらかれた万民救済のみ教えは、平家が都落ちしたころには、平家の人びとはもとより、かなり多くの都びともにも広まっていた。

私が、それまで暮らしていた三条高倉第の邸から、法皇御所である法住寺殿の一隅に建つ萱御所かやごしよに移り住んだのは、源平相戦い混乱のさなかにあつた治承五年（＝養和元年・1181）の春であつた。

この年は高倉天皇の崩御につづいて大相国清盛も死去し、世情騒然とする上に全国規模の大飢饉まで起こつた年である。

多数の餓死者が洛中の道という道にあふれ、腐臭が都中の空をつつむ惨状であつた。法皇の膝元にある萱御所に移住したのは、これらを憂え、以仁が謀反人となつてからは人の世

を恐れる心一段と深く、ただ引きこもつて生きていた私の身の安全を図る、父法皇の愛情であつたと思う。

まさに末法の世であつた。

今につづいて私の邸の家司けいし（執事）をしている藤原定家二十歳が、その父俊成に伴われて初お目見えにやつてきたのは、たしかこの治承五年の正月であつた。俊成一家と私前さき齋院家とのつながりは深く、俊成は齋院退下たいげ後の私の歌の師匠であり、定家の姉たちのうち二人までが、齋院時代から或いは退下たいげ来ずつと私に仕えてくれている。あのととき、私は父法皇が住む法住寺萱御所に移る前で、まだ三条高倉第にいた。御簾のむこうに緊張した様子で控えている俊成と定家父子に、箏をひいて聞かせたことを覚えている。

「齋院様に参上いたしますと、常に佳き香りが漂い、世情昨今の憂いを忘れます」とあの日、俊成が言つていた。当時、薫香馥郁とただよわせ箏をひくことだけが、世を厭い、世を恐れ、息をひそめて生きている三十三歳に

なる私の唯一の慰めであった。

俊成父子が訪れてまもなく、私は法住寺萱御所に移った。

翌養和二年（1181）七月、元号が寿永元年と改められたのは洛中洛外全国規模で起こっている大飢饉の災厄を、一新するためであった。源平両軍とも、軍勢を移動させられないほどの大飢饉がひろがっていた。

両軍ともに息をひそめた状況で寿永元年（＝養和二年）が過ぎ、寿永二年が過ぎていった。

そして俱利伽羅合戦・篠原合戦に連敗した平家一門が、六波羅から西八条にまたがる五千余の邸に火をはなち、都落ちしていったのは七月二十五日の早暁で、洛中上を下への大騒動であったのは言うまでもないけれど、この直前、父法皇は数人の近習をともなつて鞍馬から叡山へ逃れ、私自身はこの数日前に叔母である八条女院様所有の山莊常盤殿に、女院様方とともに逃れていた。

二十五日早暁、西山にある山莊一帯にも数

刻にわたって軍馬の足音がとどろき渡ったと思うや、一門が藁を連ねた六波羅一帯に火の手があたり、延々数日にわたって空をこがして燃え続けたことは、思い出すだに恐ろしくなる。火は六波羅から西八条に及ぶ一門の邸宅を焼亡させただけでなく、洛中の人家四万余も類焼し、都は文字通り焼土と化した。

あの時の恐ろしさは言語に尽くしがたい。

まさに、この世の地獄を私たちは身近に見聞したのである。

平家は、まだ六歳の幼い安德天皇をはじめ御母の建礼門院徳子様を奉戴して西海に落ちていった。いつとき清盛が都を置いた福原（現在の神戸市）にも火をはなつて焼きはらい、西海に出たという。

一門にかわつて五万の大軍をひきいて木曾義仲が洛中になだれ込んできたのは、二日後の七月二十七日であった。

一門が早くから師父のみ教えを仰ぎ、帰依して檀越ともなつていたことをどうして木曾が聞きしつていたかは知らない。ただこの日、

義仲側近の武士たちは師父の草庵に平家がかくまわれているのではないかと疑い、師父をはじめ法蓮房様たちみ弟子を一間に押しこめ、草庵とその周辺隅々を探索した。このため、この日一日だけ師父は、「聖教を繙くことができなかった」と歎かれた。

平家が西海で無残にはたことが都に伝わったのは、この日からわずか一年半しかたっていない。清盛の妻で安徳天皇の外祖母である二位の尼が、八歳になられた安徳天皇とともに西海に身を投げる直前、天皇を西方におむかわせになり、お念仏をとなえさせようとしたとき、周囲のただならぬ状況を察せられた幼い天皇は「尼御前、余をいずこへ伴わんとする」と尋ねられたという。

安徳天皇をはじめ一門の人々は西海に身を沈めたが、親子兄弟乳母子従兄弟など縁につながる者同士、互いに手を取りあい、念仏をとなえながら海に沈んだと何日もせず都にわたってきた。

今、あの義仲も滅び、一門も西海に滅んだ。

源氏の世になった現在、平家とたとえわすかでもかわりがあつたことは憚らねばならない時代になった。

滅亡した一門の後をおそつて都を守護する名目で入京した源氏の北条時政が、いかに無残に平家と関係があるとしておおくの罪なき幼児男女を殺戮していったか。平家一門繁栄の歲月も末世であれば、源氏の世となった現在もさらなる末世であつた。

師父にとつて、一門の人びとがあのような最期をとげたことは今に至る大きな御心の痛みとなつておられるに違いないと思う。

壇之浦で平家が滅亡した後、建礼門院を初め、生き残った女たちはみな、飢えと潮風にやせ黒ずみ、「その人」とはとても考えられぬ姿で都につれもどされてきた。

安徳天皇外祖母の二位の尼は安徳幼帝とともに壇之浦に沈んだけれど、その他の女たちの多くは生け捕りになり、そのなかには法蓮房様のちかい身内である領子もいた。

(つづく)

石田一裕



微

風

吹

動

ハスとスイレン

広く徳本を植えよ



『無量寿経』

桜が散り、まだ少し風の冷たい四月のはじめにハスとスイレンの植え替えを行った。

仏典には様々な色の蓮が説かれるが、これは蓮と睡蓮を合わせたものだろう。たしかに泥の中から茎を伸ばし、水面あるいは水上に美しく咲き誇る姿には目を奪われるものがある。『スッタニパータ』の第七一偈では、釈尊が泥から生え育ち、泥水に汚されない蓮のように歩めと述べている。蓮は人の理想の生き方を示す花なのである。

ところで、手を泥まみれにしながら実際に植え替えを行うと、この「ハス」と「スイレン」という二つの植物の違いが見えてくる。

ハスの花や葉はレンコンから生えてくる。レンコンは蓮の根と書くが、地中にあるハスの茎である。植え替えの時に水を抜き、蓮鉢をひっくり返すと、このレンコンが出てくる。鉢の中にある時は一番下に潜り、大きくなるようだ。余談であるが、これを経験すると、蓮田の地中深くに埋まるレンコンを、傷つけずに収穫する生産者の苦労を想像できるようになる。レンコンもまた泥の中にあつて、泥に染まらず、美味しくなるのだから、花同様の魅力があるように思えてくる。

さて、そのレンコンには節があり、その節の部分から細い根がたくさん生えている。ここから芽も出てくる。植え替えは芽が出ているものを選んで、新し



いしだ いちゆう 1981年北海道稚内市生まれ。神奈川教区光明寺住職。博士(仏教学)。浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師。専門はアビダルマ仏教、著書に共訳『【現代語訳】浄土三部経』(浄土宗、2011)など。

く土を入れた鉢に植え付ける。

一方でスイレンには、レンコンがない。同じ地下茎であるが、八頭のような太くてゴツゴツした形をしている。これは植え付けた鉢の上側にまで姿を見せ、また至る所から根を出し、それを鉢の下部へと伸ばして成長していく。その姿は、どことなくジブリ映画「風の谷のナウシカ」の王蟲を想起させる。

「蓮」という漢字で表される二つの植物であるが、普段なかなか目にしない水中の根を見ると、これらが違うものだとはっきりとわかる。近年では遺伝子解析からこの二つの植物が随分と異なる物であることが明らかになってきているそうだ。

表面上は似通ったものが、実はその根本で随分と違っていることや、しっかりと解析することでその違いが鮮明となることがある。私はスイレンにもレンコンみたいなものがあると、漠然と思っていたが、これは過ちであった。根を見ることで、それが理解できた。

仏典には善根や徳本といった言葉が出てくる。善いことを行い、徳を積むためには、その根本が大切であることを示している。しっかりと根付いた木には、枝が伸び、葉が茂り、花が咲く。善や徳もまた同様である。しっかりと善い根を植えることができれば、自然に善や徳を積んでいくことができるのである。

このような根に基づかない善行もあるだろう。上辺だけの善行、いわゆる偽

善がそれである。善導大師はどのような行いを真実に悖るものと指摘する。名誉や保身、あるいは打算に基づく善行ではなく、思いやりや慈しみに基づいた行為が重要ということであろう。

今回のハスの植え替えでは株分けを行った。美しい花を咲かせるためには、しっかりとした根を選ぶ必要がある。泥にまみれ、根を選別し、花が咲くように祈りを込めてその根を鉢に植えた。

『無量寿経』には「広く徳本を植えよ」と説かれるが、善や徳の根本は祈りによって我々の心に植え付けられるのであろう。

初めてハスの植え替えに挑戦して、わかったことがある。蓮や睡蓮の植え替えは、腰にくるということだ。どんな命であっても、やはりその世話をすることは大変なことである。自分の心に善根や徳本を植えることも楽な作業ではないであろう。これは時に心を挫くことがあるかもしれない。それでもしっかりと根が植え付けられれば、いずれ美しい花が咲くことであろう。

夏に向け、蓮鉢の様子を見ながら、花を待つ時間は楽しいものである。

第五回

東海道(3) 舟渡し——「七里の渡し」

森 清鑑

江戸 日本の街道探訪

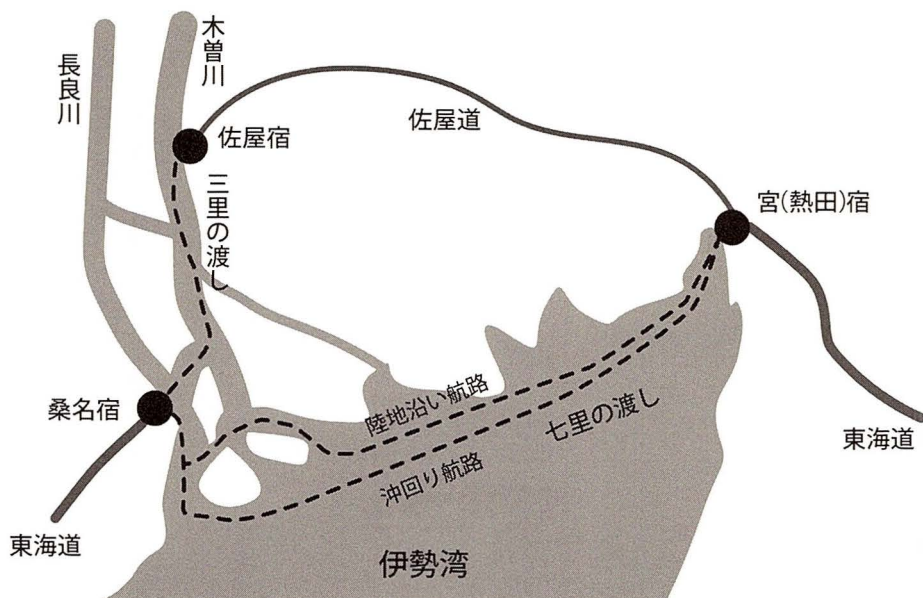
家康の
全国道路網
造り

東海道正式海路、官道の「七里の渡し」

豪華な朱塗りの巨大な船が宮（熱田）港に入港。圧倒的な迫力である。船を泊め、数人の家来が細長い舟に乗り移り、渡し場に向かっている。渡し場では、大勢の家来が座して殿を迎えている。江戸に向かう大名行列の一行が「七里の渡し」の航海を終えて宮宿、熱田の渡し場に着いて上陸している光景と思われる。

家康は東海道に宿駅制度を創設するに当たって、地元の三河、熱田神宮の側（そば）に宿場を設けた。これが宮宿である。この宮宿から伊勢湾海岸線沿いに航行し、桑名宿に達する船旅が「七里の渡し」である。その距離七里、約28km。東海道の正式海路であり、官道である。

七里の渡しは東海道で唯一、海を渡るコースである。家康はこの海の舟渡しを東海道の正式ルートと定めた。この海上ルートは鎌倉、室町時代か



七里の渡しの航路。陸路は佐屋街道

ら使われている歴史のあるルートであること、何よりも陸上に行くより大幅な時間短縮が期待できること。そして旅の費用も安くすむ。そこでこの渡しを「七里の渡し」と明示し、両港の整備、舟・船頭など運行に携わる職人の組織造り、宮宿・桑名宿双方の大規模な宿場造りに着手する。やがて、七里の渡しは「海を行く東海道」の名物となり、関東から来るお伊勢参りの人々も皆、この七里の渡しを利用することになった。結果、宮宿・桑名宿は、東海道で一、二を争う宿場に発展する。

「七里の渡し」の航路

「七里の渡し」の海路図（前頁）を見る。

東海道は三河の国に入ると、岡崎、池鯉鮒宿、鳴海宿を経過し伊勢湾沿いに北上し、宮宿（熱田宿）に到達する。その位置は名古屋城から南へまっすぐ下がり、熱田神宮に近い伊勢湾口地点。そこから舟に乗り、伊勢湾岸沿いに西へ航海し伊勢の

桑名港に入る。

航路は内回りルート（陸地沿い航路）と外回りルート（沖廻り航路）があり、通常、満潮時は内回り、干潮時は外回りを採用する。「七里の渡し」の七里とは、宮宿から桑名宿までの地理的な距離のこと（約28km）で、潮の流れと気象条件次第で航路の長さや航海時間は異なってくる。また伊勢湾の埋め立て工事が進捗しており、海岸線は江戸の始めと終わりとでは大分異なっている。

航海時間は順調に行って4時間から6時間と云われている。しかし、10時間もかかったという記録もある。

渡し舟の種類

【御座船】ござぶね

この航路に使われた舟は、参勤交代の大名が乗る御座船と呼ばれる豪華な舟から、一般庶民が乗る帆掛け船まで各種在った。御座船とは、天皇、

公家、将軍、大名などの貴人が乗る豪華な舟のことで、華麗な屋形が組まれている。そしてその屋形の屋根の形式で身分を表したという。天皇は茅萱葺き、将軍の舟は檜皮葺きと云う具合に。また江戸時代には、大名は中型軍船、関船を豪華に飾り立てて使ったという。

【帆掛け船】

大名が乗る豪華な御座船に対し一般庶民が乗る帆掛け船はまさに普通の帆掛け船。その七里の渡し

の船賃は、

45文

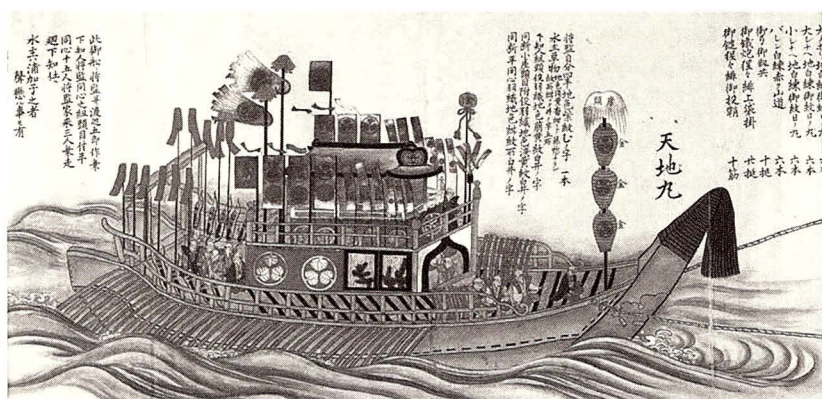
旅人一人

100文

荷物一駄

123文

馬一頭口取り足付きでと決められていた。一文が現代のいくらに相当するかの計算は難しいが30円（大井川島田市観光案内）とすると、一人1350円。妥当な値段と云える。



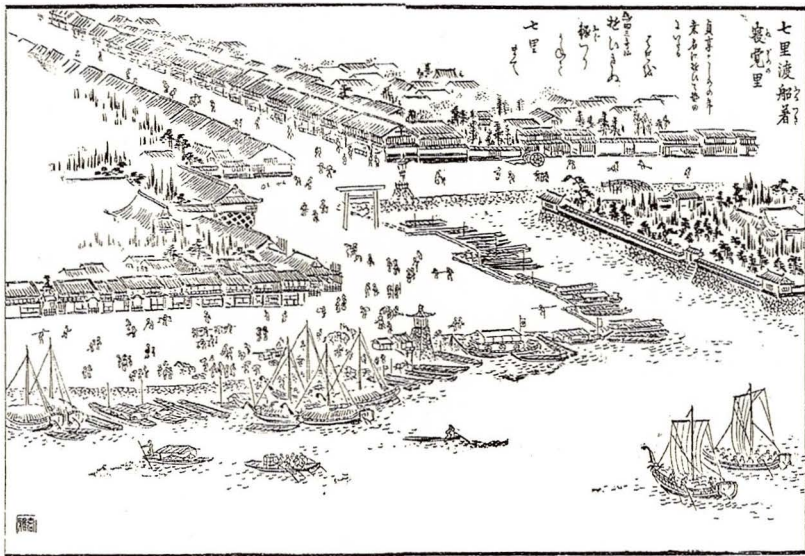
徳川将軍家の御座船「天地丸」

宮宿——53宿中、最大規模の宿

七里の渡しは旅の名物となり、熱田神宮詣（第二の伊勢神宮と云われるくらい格式が高い）、お伊勢参りの参詣客が宿泊する宮宿と桑名宿は大きく発展する。結果、宮宿の宿泊施設は、本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠248軒となる。これは53宿の中で文句なく一位の規模である。ちなみに品川宿の旅籠数は93軒である。

宮宿の七里の渡し船着き場と背後に連なる宿場の様子を見るとスケールの大きさに圧倒される。石垣で仕切られた広大な船着き場には、大型帆船が何隻も繋がれており、多数の荷舟、屋形船が行き交い、大型帆船2隻が入港しようとしている。海沿いに巨大な常夜灯が立ち、その後ろに大鳥居（熱田神宮）が聳えている。そしてその背後から旅籠が一直線に見渡す限り並んでいる。

広重の絵は、格調高い隅櫓風の建物と屋敷を右



宮宿、七里の渡し船着き場と宿場。「尾張名所図会」

に7艘もの帆立船が帆を下ろして停泊している船着き場の場面。熱田神宮の鳥居と常夜灯が立っている。

また、宮宿に入港した御座船の迫力が凄い。朱塗りの船体、海に突き出た何十本もの櫓。参勤交代の大名が渡船。先に渡った家来達が宮宿船着き場の石垣の上に座して迎える姿。壮観である。御座船から小舟に乗り換え、岸壁を指す家来の姿も見える。何人もの船頭が櫓を漕いでいる様子。小舟とは云え、長い舟である。この大名行列の七里の渡しの船賃は一体いくらかかったのだろうか。

桑名——伊勢神宮参拝の玄関口

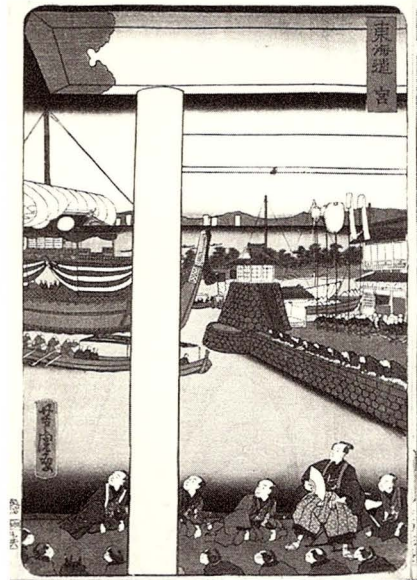
戦国時代、「家康に過ぎたる物が二つあり、唐の頭に本多平八」と謳われ、家康を伊賀越えで救い、あらゆる戦に戦陣を切って切り込み、かすり傷一つ受けなかったという本多平八郎忠勝。徳川



広重：宮宿の船着き場

の四天王で腹心中の腹心である。

家康は関東の重要な拠点、房総の大多喜城構築を本多忠勝に命じる、次いで西の拠点、桑名藩の藩主に任命する。本多は揖斐川沿いに堅固な桑名城を構築。その傍らに七里の渡し船着き場を整備する。客を満載した帆立船が桑名港に入る。左手、城壁の上に桑名城隅櫓が燦然と輝いている。上陸すると大きな鳥居が立っている。これは伊勢



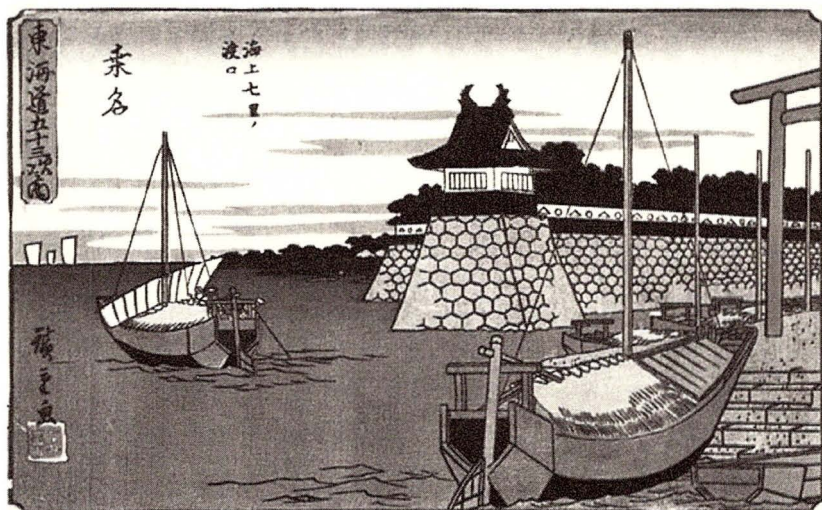
芳虎 七里の渡し宮宿に入る御座船と大名一行。前面の鳥居は熱田神宮の鳥居。中央に常夜灯が描かれている

神宮参詣への一の鳥居なのである。ここはお伊勢参りの玄関口なのだ。

発展した桑名宿の規模は、本陣2軒、脇本陣4軒、旅籠120軒に及んだ。この旅籠の数は、東海道53宿中、宮宿について第2位の規模となる。

脇往還 佐屋街道(姫街道)

船旅を好まない人のために、宮宿から桑名宿ま



広重 七里の渡し、桑名の船着き場

で陸路を行く脇往還、佐屋街道があった。これは宮宿から岩塚宿、神守宿を経由し、木曾川支流の佐屋川に出る。そこに佐屋宿がある。瀟洒な料理屋などもあり洒落た宿場である。宮宿からここまで6里の歩き旅。そしてここから舟に乗る。

木曾川を下ること3里、桑名宿に到着する。全部で約9里（36 km）の道程である。佐屋路は寛永11（1634）年、將軍家光が上洛の際に尾張初代藩主徳川義直が開いたルートとされる。時間がかかるが船旅に比べ安全、着実なルートというわけで、婦人、子供が多く、別名姫街道と呼ばれた。佐屋路経由の経費は、七里の渡しに比べ2.5倍もかったというが、優雅で安全な旅が期待できるため、迂回路として盛んに利用されたという。

もり せい かん

1941年東京生まれ。大学卒業後ドイツ系商社に入社。その後、海外情報、広告・マーケティング調査・分析、インフォメーション・オン・デマンドサービス事業に携わる。廃棄物関連調査 Mott & Associates 主催。

法然上人鑽仰会の その後の 経過

佐藤賢順

相次ぐ支部の設置

『浄土』の月極め購読者が5名以上できた地方では支部を作れる規定になっていて、支部は『浄土』購読のほかに講演会や座談会や研究会など色々な事業ができることになっているので、続々として支報告が各地から舞い込んでくる。既に72の支部が設置された。少ない所で5、6名、多いのになると鹿児島支部、朝鮮釜山支部、同大田支部、静岡県焼津支部の各100名。20名、30名の所はザラにある。月極め購読は誌代年額1円で『浄土』の他に月刊新聞『法然鑽仰』が配布され、その上、色々な特典を得られるからなるべく早く各地に支部を作っていたきたい。

歴史的盛観！ 本会発会式

約半年の多忙な準備期間を経て諸般の準備

さとう・けんじゅん 1899(明治32)年～1962(昭和37)年。東京生まれ。品川・願行寺28世。西洋哲学、宗教学者。宗教大学(現大正大学)で宗教部、早稲田大学の西洋哲学専攻科で学ぶ。法然上人鑽仰会設立に参画、また仏教信仰のラジオ放送を行う。著書多致。

全く完了して機縁も円熟したので、ついに4月12日正午から京都知恩院山内華頂会館において発会式を挙行了した。その前夜、中部日本から九州へかけての代表的な人達40余師の参集を煩わして、会の事業、将来について腹藏なき意見を求めて、それぞれにこの聖業の健やかに生育するよう協力するという支持を得て、会の前途は愈々洋々たるを思わせた。

12日は桜の季節にありがちな数日来の曇りがち、降りがちな天気もすっかり拭われて、東山一带の桜も新緑も、鴨河原の柳の芽も、一段と春光も映えていた。参集せる全国の代表実に800名、老若しそ、色とりどりである。佛教専門学校学生350名の他に、諸他の学生の参加を加えると優に1000名を超えている。

代表には北は樺太、北海道から南は鹿児島、はるかに朝鮮、満州から参加した人さえある。

かくて、この多数の感銘のうちに法然上人鑽仰会発会式は挙げられた。このような歴史的景観がかつてあったであろうか。その全ての報告は遺憾ながら月刊新聞『法然鑽仰』に譲る。

祖廟前の結盟宣誓式

発会式が終わると、法然上人御廟前の宣誓式がこれに続いた。会場を出た1000名の大衆は誰言うことなく、自ずから四列縦隊を作って、静々と進む。黒門から御廟前の急坂へと進む大行進は延々と長蛇の列である。口々に高声に唱和する大念仏は華頂全山を揺るがすかとも思える。大衆は祖廟を十重二十重に囲んだ。もちろんあまり広くない御廟所のことであるから、大半は遥か下の広地でこの盛儀を仰いでいる。一会の回顧ののち、厳かに読まれた結盟宣誓文の最中には、どこからともなく歎歎※ききよの声さえ聞こえてきたのである。

編集後記

前号に引き続き、昭和10年の当会設立の頃に関わる話から。

『浄土』創刊当時の発行人であり編集人だった佐藤賢順師の「法然上人鑽仰会のその後経過」と題された2ページ前の記事は、2、3月合併号、4月号の連載記事を受けた続編である。まさに発足当時の当会の昇竜のごとき勢いや、樺太、満州にまで支部が続々と作られ、知恩院華頂会館での1000名超えの発会式と驚くことばかり。

こうした発足当時の様子は、前号で紹介した当会発行の月刊新聞『法然鑽仰』に詳細に記されている。しかし、手元には第11号しかない。それも本当に偶然見

つかった貴重なものだ。

5年後に『浄土』は通巻1000号を迎える。そこに照準を合わせ当会の歴史をまとめたのだが、この『法然鑽仰』のバックナンバー探しは欠かせない。全国の浄土宗寺院の先代や先代の蔵書や資料として運良く残っていることを祈念したい。

本誌昭和11年7月号の倉田百三氏の「授かりし智慧」を掲載した。氏は本誌に4回寄稿されているが、その最初の原稿で、法然上人の念仏の心を汲み取り、人のひとすじ道を明快、そして揺るぎなく説いている。ぜひお読み下さい。

当会でWebサイトを立ち上げる。担

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐成寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 加藤昌康(下北沢・森厳寺)
 河本悠大(函館・称名寺)
 糸原恒久(川越・蓮馨寺)
 糸原勇慈(甲府・瑞泉寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤久雄(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良昌(塩釜・雲上寺)
 高口恭典(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 成田昌憲(世田谷・大吉寺)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 長谷川岱潤(東京・戒法寺)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多将敬(両国・回向院)
 松濤泰彦(芝・寶松院)
 水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ jodo.ne.jp/

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

当の若い編集者は近々お知らせするが、私のような紙媒体の活字世代としては何かと驚くことばかりである。新陳代謝が必要、ということか。

(村田)

編集長 編集部員

村田洋一
 斎藤晃道
 佐山哲郎
 青木照憲
 平井泰代子
 本原堯道

浄土

八十七巻 六月号

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 令和三年五月二十日

発行 令和三年六月一日

発行人

編集人

佐藤良純
 長谷川岱潤

印刷所 株式会社 暁印刷

〒一〇五〇〇〇一

東京都港区芝公園四七西明照会館四階

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

写シリーズ

便利で書きやすいA4版の奉書で、
誰でもできるなぞり書き仕様です。

写仏

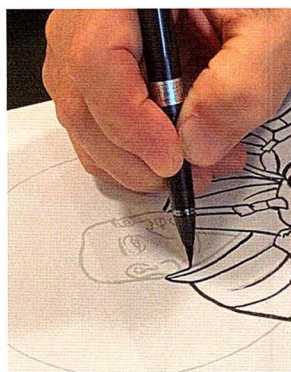
阿弥陀三尊、薬師如来、地藏菩薩、法然上人
1セット6枚の5組入り5000円

写経

浄土宗日常勤行式(三奉請版、四奉請版)
1セット12枚の5組入り6000円

写詠歌

宗歌「月かけ」と法然上人四季の御詠歌
1セット5枚の5組入り3000円



書籍シリーズ

『浄土』連載の単行本から書き下ろしまで、
読み応えのある本をお届けします。

『浄土・念仏読本』復刻版

2000円

『和英対応 法然上人のお言葉』 梶村 昇著、川西良治訳

1000円

『浄土の道』 真野龍海著

1700円

『差し出し人は法然さま』 袖山榮輝・林田康順・小村正孝共著

600円

『響流十方』 袖山榮輝・林田康順・小村正孝共著

600円

『響流十方』 其の二 袖山榮輝・林田康順・小村正孝共著

640円

※表示価格は定価で税別となります。

ご購入とお問い合わせはこちらへ

ほうねんしょうにんさんこうかい

法然上人鑽仰会 105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

TEL 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036 Mail hounen@jodo.ne.jp HP jode.ne.jp

法然上人鑽仰会の本

浄土・念仏読本

A5判123ページ 二千円(頒価)

月刊誌『浄土』が昭和10年に創刊された翌年、当時の浄土宗を支えていた錚々たる僧侶が、その念仏への強い思いを込めて寄稿したのが、この『浄土・念仏読本』です。今ネットで『浄土』バックナンバーのPDF無料公開が話題になっていますが、やはり本は手にとって読みたいもの。どうぞ、この一冊をお手元に。

昭和11年11月発行の
『浄土・念仏読本』復刻版



目次に錚々たるか顔ぶれが並んでいる

浄土・念仏読本 目次	
念 佛 の 意 義	推尾辨匡
死 生	中村辨康
佛 教	佐藤賢順
信 仰	大野法道
本 願	眞野正順
念 佛 の 集 行	石井教道
社 會 生 活	笹本戒淨
女 性	島野禎祥
家 庭 生 活	江藤滋英
一 枚 起 請 文	佐藤春夫
小 消 息	小西存祐
作 者 人 上 然 法	稻垣眞我
選 擇 本 願 念 佛 集	井川定慶
良 慶 和 上 の 臨 終	矢吹慶輝
聖 な 願 行 を 領 納 す る	梅原眞隆
強 坊 德 本	松浦一
裸 坊 德 本	中野英善

《ご購入は裏面へ》